

それではヘブル書 12 章、改めまして前回同様 5~11 節をテキストとして一度通して読ませて頂きます。『⁵そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。⁶ 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」(これは箴言 3 章からの引用です。)⁷ 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。⁸ もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。⁹ さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちが懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。(ここでヘブル書の記者が、私たちには肉の父がいて私たちが懲らしめたのですがと。ヘブル人、すなわちユダヤ人の間では父親が子供を懲らしめる。具体的には愛のむちを持って。現代の表現で言えば、尻打ちをする、スパックをするというのは、ごく自然なことであったということです。当時のヘブル人の、ユダヤ人の社会では父親が子供を躰ける。これは勿論児童虐待に発展するようなものではなくて、しっかりと御言葉によって諭して、その上で「何のためにスパックをするのか。何がいけないことなのか。」そのことを聖書から説明した上で、どうしても口で言って聞かない頑なな子にはむちを与える。これは箴言にも即した聖書的な子育て方法であります。それを彼らは実践しておりました。私たちには肉の父がいて、私たちが懲らしめたのですからと。聖書的な子育て論を踏まえた人たちに、このヘブル書 12 章が語られているということも皆さんに心に留めて頂きたいと思えます。そして皆さんは今ヘブル人の人たちと同じように、聖書から神様の子育て論を教えられて、彼らと同じ立場でこの箇所を学ぶということを感じて頂きたいと思えます。)¹⁰ **なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちが懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。**(肉の父が子供を懲らしめたのと同様に、私たちの霊の父も、天の父なる神様も私たちが子供として扱って、愛のむちを加えられます。ただ、それは全く同じ質ではないということも後に触れていきたいと思えます。肉の父よりも、霊の父、天の父がどれほど愛のお方であり、そして正しいお方なのかということも知ることが出来ます。最後に)¹¹ **すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。』**

“懲らしめ”と“訓練”という言葉は、原語では同じ言葉が使われていると言いました。懲らしめるというのは、ただ単にむち打って肉体的な体罰を与えるというところにとどまらず、それは訓練を目的とする。子供の成長を願って行うものであります。親が、ただ口で言うのが面倒くさいからすぐに手をあげて言うことを聞かせるとか、ストレスがあるから子供に八つ当たりをして暴力を振るうといった児童虐待とは全く異質のものだということを前回お話ししました。

そして具体的な話としまして、これも現代、聖書的な神の子育て論がなされなかったが故に、今社会は病んでいるということ、そのような聖書的な子育て論によって育てられなかった人たちが今大人となって、またその大人が家庭を持って子供を育てる中で、様々な社会の問題、社会的病理、そして犯罪といった事にまで大きな影響が及んでいるということをお話ししました。具体的な話の中ではアメリカのベビー・ブーマーの時代、1946年から1959年生まれの人たちのことをベビー・ブーマーとアメリカでは言います。ベトナム戦争に反戦する運動、反戦運動。またヒッピーの人たちがビートルズや、ウーマン・リブや、麻薬や、フリーセックス、お酒といったようなカルチャーの中で生まれて育ってきたわけですが、日本では1947年から1949年生まれの人のことを第一次ベビー・ブーマー、特に団塊の世代と言います。今はもう60代ということなんですけれども、そのアメリカのベビー・ブーマーの世代にしても、日本の団塊の世代にしても、彼らには、これまでの伝統的な古き良き子育て論から外れてしまって、近代の心理学による子育て論によって大きな影響を受け、そしてそれが今の社会の問題というふうにつながっていくという話をしました。その中でキー・パーソン”key person”となるのがベンジャミン・スポック博士でありました。その

『ベンジャミン・スポック博士の育児書』、これは世界中に翻訳されてベストセラーとなって蔓延したわけですが、日本の母子手帳にも厚生労働省によって、このスポック博士の子育て論が公的に導入されて、未だにそれは変わりません。ただ、アメリカではもう 30 年も前にこのスポック博士の子育て論には、大きな問題があるということが取り上げられまして、そして今では危険視もされているわけですが、日本ではまだまだそのようには取り扱われておりません。その中でいくつか先週お話ししたものと、また今から少し具体的な話をして、何がどんな弊害がもたらされたのかということもお話ししたいと思いますけれども、この『スポック博士の育児書』というのは、最初東大の高津忠夫教授という人によって、当時小児科医でありましたが、医者仲間たちや、またインテリ層にこの育児書が一斉に紹介され広まっていったわけですが、それをもとに子供が生まれたら出産祝いにこの『スポック博士の育児書』を誰もがプレゼントするような習慣すら日本でも生まれました。「東大の先生が言うことだから、承認することだから、これは良いものに違いない。」といった日本人の権威に弱いそういう気質からもどんどん受け入れられていったわけですが、ただ、その子育て論の中においていろいろな問題が既にアメリカの中で生じていたわけです。どんな問題かと言いますと、子供が、赤ちゃんが突然死亡してしまうという事件が、アメリカ各地で起こりました。その原因には、蜂蜜があったということが判明しています。蜂蜜の中にはポツリヌス菌の胞子が含まれていて、1 歳未満の乳児に生の蜂蜜を与えると、それがそっくり腸管から吸収されてしばしば死を招くという感染症を起こすと。そのことがポツリヌス菌事件としてアメリカでは 1980 年代に起こって、このスポック博士が実は離乳食を赤ちゃんたちに、生後 5 ヶ月から 6 ヶ月になれば母乳はもう止めて、ミルクを止めて離乳食を与えるようにという勧めから、実はこの事件が発生してしまいました。赤ちゃんに大人と同じ食べ物を与えるということから、このような感染症だけではなくて、アトピー性皮膚炎もこれが原因で、生後 5 ヶ月、6 ヶ月から離乳食を与えることになってどんどんひき起こされていって、所謂アレルギーマーチというもの、アレルギーがマーチするような、例えば皮膚炎、喘息、小児リウマチ、心筋症、腎疾患、血液疾患、多動症、自閉症、てんかん、それがマーチのように次々に起こっていく。それをアレルギーマーチと言いますが、その原因は今やこのスポック博士が推奨した「生後 5 ヶ月から 6 ヶ月で離乳食を始めて赤ちゃんに大人と同じ食べ物を与える。」ということから生まれたと。そして、日本では近年私の世代はまさにこの『スポック博士の育児書』によって育てられた世代ですけれども、沢山のアレルギーの子どもたちが生まれ、そして私たちが(団塊ジュニアの私たちが)産む子どもたちも皆、大半は何らかのアレルギーを抱えております。ただ、アメリカではこのことはもう危険視されて周知のこととされておりますけれども、日本では未だにこの『スポック博士の育児書』は肯定的に受け入れられております。人の命に関わることであっても、深刻な病気をもたらすものであったとしても、何故か日本ではまだこのことは否定されておられません。その理由として商業的な理由、利権が絡んでいるということもお話ししました。そのスポック博士の問題については、別の観点から「赤ちゃんは生まれながらに善である。」性善説と、所謂放っておいても悪くはならないといった教えも、これもわがままな子供を育てて、そして最終的には、それは ADD だとか、ADHD といった症状までも引き起こしてしまう。それがまた大人になって凶悪犯罪にも結びついていく。その話もしました。アメリカのベビー・ブーマーが、アメリカ史上最も凶悪な犯罪者を生み出しておりますし、日本の犯罪史上団塊の世代の今の 60 代の人たちが最も犯罪を犯しているというのはあまり知られていませんが、彼らはそのように育ててきてしまったのです。キレやすいだとか、そんなことが現代の若い人たちに言われますけれども、しかし本当にキレやすいのはデータ上団塊の世代の 50 代、60 代の人たちだったということをお話ししました。そうした事実と共に、今聖書的な神様の育児書、聖書から本来あるべき姿、そして実際に神様抜きにした心理学を取り入れたスポック博士の児童心理学を取り入れたような子育て論が如何に危険なものなのか。そして実際に社会に弊害をもたらしているのか。その辺も併せて皆さんには深刻に考えて頂いて、私たちの周りではそのことは正しく認知されておられません。授業中に子供がじっとしてられない。席を勝手に立ってフラフラしてしまう。ADD だとか、ADHD といった症状が深刻化されて、それは**注意欠陥多動性障害**、そういうふうに使われていますけれども、一昔前までは**心の病**などとも言われましたが、今では**行動障害**だとか、**発達障害**などと言われますが、原因が未だに分かっていないのです。それは発達障害というふうには日本では決め付けられていますけれども、実際には発達障害とも言え

ないのです。なぜならば、原因が分からないからです。

最近私はホームページで、大人の ADHD をセルフチェックしてみましょう、というものがあまして、ADHD すなわち注意欠陥多動性障害は、小児期だけではなく成人になっても 40～80%の方において症状が継続すると言われている病気です。そして、この簡単なセルフチェックに答えて、まずは試験的に薬を飲んでみませんか、というようなホームページがありました。この ADHD の治療は薬物によって行われます。その薬物の危険性もお話ししましたが、今折角ですのでここに集まる大人の皆さんに、この ADHD のセルフチェック項目を、今口頭で言いますから、該当すると思ったらいくつかチェックを皆さんもどこかにメモして頂きたいと思えますけれども。

- ・喋りすぎることがしばしばある。
- ・余暇活動では乱暴になるか、騒々しく騒ぐことがしばしばある。
- ・席を立つべきでない時に、席を離れることがしばしばある。
- ・列に並んで待ったり、人と代わる代わる順番に行くことがほとんどの場合難しい。
- ・いつもあちこち動き回っていることがしばしばある。
- ・手や足をそわそわと動かし、椅子の上でもじもじすることがしばしばある。
- ・落ち着きがなかったり、活動しすぎることがしばしばある。
- ・質問が終わる前に、出し抜けて答えてしまうことがしばしばある。
- ・他の人が働いていたり忙しくしている時に、邪魔することがしばしばある。

今の項目の中でいくつか該当した人もいますが、6項目以上該当した人は ADHD の危険性があると。もう一つの観点として、

- ・課題や活動に必要な物、例えばやることリスト、鉛筆、本、道具などをなくすことがしばしばある。
- ・仕事や余暇活動に集中し続けることがほとんどの場合難しい。
- ・日々の活動で忘れっぽいことがしばしばある。
- ・他の人が話しているのを聞いていることが、ほとんどの場合難しい。
- ・不注意な過ちをする。または綿密に注意することが難しいことがしばしばある。
- ・よく考えることが必要とされる学問的な研究や仕事上のプロジェクトは、ほとんどの場合好きではない。
- ・作業や学校の課題をやり遂げることが、ほとんどの場合難しい。
- ・周囲の物事に注意がそらされてしまうことが、しばしばある。
- ・課題や活動を順序建てで行うことが、ほとんどの場合できない。

今後半の9項目の中でやはり6項目以上該当する人は、ADHD の可能性があります、というふうなセルフチェックです。これは今皆さんにお伝えしましたが、私はこのことを別に信じて皆さんに ADHD であることを認めさせようとか、そういうことを意図としているのではなくて、こんなことで皆さんは ADHD だと診断されるのです。これは大人のものですけれども、子供にも勿論このような診断が成されて、そしてどんな治療があるかという薬漬けにされるだけです。

この ADHD が薬漬けにされることによって、様々な弊害が生じました。1997年の神戸児童連続児童殺傷事件は記憶に新しいと思います。加害者の少年の通称『榊原少年』中学1年生の時に実は精神科で ADHD だと診断されました。でも残念ながら日本ではこの ADHD 注意欠陥多動性障害は発達障害だという認識を持って、薬物で治療しようとしています。または何か遺伝的な問題があるんだとか、そのような先天性のものであるとか、いろいろな理由が言われているのですけれども、でもそれが急に現代になって急増するというのはやはり不自然だということなんです。ADHD を持つ人のほとんどは、楽しいことをしている時は問題なく集中していると言われていています。嫌なことになる時には集中出来ないということです。それは何を意味するのでしょうか。また、ADHD の脳を調べて、異常な脳が見つかりましたと。ただ、その脳はよくよく調べてみると精神治療薬で実は脳が異常になってしまったという。ADHD だと診断されて、その後精神治療薬を服用している中で、脳がおかしくなってしまった。そして悪化してしま

うということもあります。

日本では発達障害者支援法というものが施行されて、ADHDを含む発達障害を早期の段階で発見しようと言うことで、長野県の駒ヶ根市では5歳からこの検診を始めます。5歳児の検診を始めて教育相談の教師が就学支援委員会の結果を受けて保護者に説明するのです。そのため通常級にどうしても行かせたいという親が減ったと言います。5歳の段階でもADHDだと言われて「あっ、これはもう普通の子供ではないんだ。」ということで、通常のクラスではなくて、このような病気であるということで通常のクラスではないクラスに親が子どもを行かせると。それが駒ヶ根市では増えているということです。それを診断しているのは素人たちです。勿論精神科医ですら原因が分からないわけですから、実際にハッキリした事は言えないですけども、通常のクラスにはそういう子供はもう行かせないと。そのようなことも身近なところで起きております。

そして、これはイギリスの発表ですけども、ADHDの原因として合成着色料の入った食品が引き起こしているのではないかと。実際に赤色40号、赤色102号、カルモイシン、黄色4号、黄色5号、キノリンイエローといった食品添加物が入っているもの、そうしたものを除去して与えた結果、子供たちからこのADHDの症状がなくなっていったということも発表されています。70～80%以上の子供が、ADHDが改善するというデータが出ております。合成着色料と合成保存料を除いた食事を与えるだけで70～80%のADHDの症状が改善されるという症例も出ております。これはイギリスの話ですけども。

また、実際にADHDになりますと、薬物を処方されるわけですけども、その薬物は実は覚醒剤と同じです。事実成分は覚醒剤と全く同じなのです。それを、リタリンというものが昔はよく与えられたわけですけども、それもまた問題となって日本では今は控えられている段階ですけども、それでも常習性が高いもので、このADHDのリタリン治療を受けた者は成人してからコカイン使用率、喫煙率が2倍に跳ね上がるというデータも出ています。

アメリカでコロンバイン高校銃乱射事件も起こって、皆さんもその記憶も無くしてはないと思うのですが、その犯人は軽度の発達障害者だったと言われております。リタリンを飲んでいただけではなくて、抗うつ剤のルボックスというのをこの子供たちは飲んでいました。実はこのコロンバインのコロラド州の教育委員会は、学校の先生が子供たちにリタリンを勧めていました。ですから今はこのコロンバイン高校銃乱射事件が起こって以来、これは問題であるということで、もうリタリンを飲ませる事はやめまじょうと、学校の先生までもがリタリンを飲ませたのです。というのは、楽だからです。手のつけられない生徒を抑えるには薬で抑える。でもそれが大きな問題を引き起こしました。

そして、何故それが日本ではそれほど危険視されていないのか。厚生労働省はそのことに勿論気付いているわけですけども、一応リタリンの乱用はもう社会問題ともなりましたので、それについては今はADHDの治療には用いないという方針をとっていますけれども、アメリカでもリタリン治療はいち早く問題とされて、1995年にこれはTV放送されたのですけれども、その年の調査報道の1位を獲得するような注目度の高い番組として放映されました。リタリン製薬会社のチバガイギーという製薬会社があります。今ノバルティスという製薬会社に名前を変えていますけれども、そのリタリン製薬会社とアメリカ最大のADD若しくはADHDサポート団体のCHADDの間にある財政上の関係が長い間明らかにされてこなかったという報道をしました。このCHADD、これはADDのサポート団体です。それとチバガイギーというリタリンの製薬会社との関係は既に1988年に始まっていて、会員800名から3,500名へとこのCHADDが拡大するのを助けてきたのがこの製薬会社のチバガイギーであったと。このチバガイギーが何百万ドルというお金を支援しています。CHADDは何百もの家庭にADD若しくはADHDに関係する人たちに助言を与えていて「リタリンをとにかく飲みなさい。」と。リタリンの製薬会社が沢山の支援金を出しながらリタリンを飲ませていたという、そんな癒着の関係が報道番組ですらば抜かれたわけです。ですから、何故このような危険の伴う弊害が明らかな薬物治療が未だに行われているのか。アメリカではもうこのことはすっぱり抜かれたので問題視されましたけれども、日本ではそのことは表面化されていません。日本でADD、ADHDに薬物治療が未だに危険性が分かっているも行われ続けているのは、利権の問題であります。製薬会社がそのことを握っているんです。

日本最大の親の会、ADD、ADHDの親の会の“えじそんくらぶ”というのがあるんですけども、その“えじそんく

らぶ”の代表の高山恵子さんという人は、アメリカの CHADD の会員でもあります。そして、この高山さんは「リタリンは、コーラやコーヒーと同じである。」と説明して、関係する医療機関や子供や大人に紹介しているわけです。ですから今 ADD や ADHD の子供を抱えて悩んでいる親御さんたちはこの“えじそんくらぶ”に入会して、そして「とにかく薬を飲ませて子供たちを抑えつけましょう。薬漬けにして親は楽をしましょう。」ということを推進しております。

いずれにしても今お話した事はほとんど表に出てこないことですが、リタリンといった薬物は覚醒剤と同じ成分です。中枢神経の刺激をする薬で、メチルフェニデートというのがその薬物の正式名で商品名が「リタリン」と言います。アメリカでは 1990 年から 2000 年にかけてこのリタリンを服用した人が 186 人も死んでおります。2006 年に毎日新聞が報道したことですけれども、リタリンで死んだのは 2006 年のその 1 年間だけで子供は 19 人、大人は 25 人も死んでおります。それを今、日本でもかつては飲んでいました、服用させてはいたけれども、さすがにリタリンは避けましょうと。ただ他の薬物はまだ飲ませております。かつてはアンフェタミンという ADHD の薬がありました。武田製薬から出ていましたが、それは今は世界中どこでも違法となっています。今飲ませているものも常習性が高く、覚醒剤です。あの芸能人の麻薬汚染を引き起こした MDMA と同じ成分です。覚醒剤です。カフェインも覚醒剤の一種とも言えますけれども、だから「コーヒーと同じです。」と言うわけです。

そのようなものを私たちは「精神科医が処方するものだから。お医者さんが処方するものだから安心だ。」と言って子供に平気で飲ませます。そして大人も勿論飲みます。効果があるからだと思っていて、これは抗うつ剤とかにも沢山含まれておりますけれども、そうしたものを私たちはいつの間にかこの社会の病理には効果的なものであると。ところがそれが今様々な問題を引き起こして、凶悪犯罪にもつながっているということを知らなくてはなりません。そして、そうしたことをすべて押さえた上で、その原因を追求しますと、やはりベビー・ブーマーの、団塊の世代の時代に、神様抜きとした心理学が教会の中にも入り込んでしまっていて、そして聖書の、神様の子育て論から外れて、クリスチャンの親たちも同じように子供を育てるようになりました。そしてクリスチャンの子供たちの中にもいろいろな症状が出て、それは ADD や ADHD だけではなくて、アレルギー症状もそうです。アレルギーがあると子供たちは夜寝れないのです。ですから学校に行っても集中できないのです。すべての原因は罪だと言いましたけれども、子供に罪があるわけではありません。薬がすべての原因だとも言いません。医者が言うことに私は全て反論するわけではありませんけれども、しかし究極的に全て突き詰めていきますと、私たちが神様から離れてしまえば当然私たちは罪に陥るだけで、人間的な処方、人間的な手段で、何をしても罪の問題は解決出来ません。むしろ悪化するだけであります。ですからいろいろな原因は考えられますけれども、私たちは聖書からその原因はハッキリ 1 つだけ、それは罪から来ているということを認めていきたいと思えます。

そして、その上で今からさらに踏み込んで皆さんにはお分ちしていきたく思うのですが、テキストの方に目を戻していただいて、ヘブル 12 章 11 節のところに『すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。』と。聖書的な懲らしめ、訓練、子育て、躰、聖書的なスパイクというのは、平安な義の実を結ばせるという素晴らしい約束が伴っております。非聖書的な心理学を取り入れた『スポック博士の育児書』に基づいたような、日本の厚労省が推薦するような、また日本の精神科医たちが推奨するような子育て論というのは、または薬物治療というものは、このような平安の伴う義の実というものをもたらすことは出来ません。むしろ薬漬けの毎日、または凶悪犯罪者に子供を育ててしまいます。そして親は行き詰まり、育児ノイローゼになり、そして疲れ果てて平安を失ってしまいます。何が正しいことなのか、分からなくなってしまう。その中で唯一の手段は、スパイクだということをお話ししました。お尻を叩く事。手で叩くではありません。むしろ、何らかのスパイク棒で、アメリカでは wooden spoon とか、paddle というものが使われます。それは子供を怪我をさせない程度のもので望ましいわけですが、手で叩いてはいけません。手は愛のシンボルであります。むしろむしろ叩くということ。そのことを箴言の中でもいくつかの箇所を皆さんに紹介して、先週お話ししましたので、ここに居られなかった方は是非前回の内容をもう一度聴いて頂いて、誤解のないようにして頂きたいと思えます。「うちの家庭は子供にしっかり体罰を与えて育ててきました。でも、

今は家庭崩壊です。スパイクなんか全然効果がなかったんです。」と言うかもしれませんが、そのスパイクの仕方に問題があるかと思います。その辺を前回述べておりますので、ただ叩けばそれで良いわけではありません。しっかりと叱責を持って、叱責とむちのバランスが必要であります。聖書から「何がいけないのか。これは罪である。そしてこの罪を犯し続ければどうなるのか。」そのこともしっかり説明した上で、妥協なくスパイクをする。しかも時間を置くことなくスパイクをするということ。その重要性もお話ししました。

その中で皆さんの中にはいくつかの疑問が生じるかもしれません。「神様は私たちに懲らしめると言っても、神様にそんな権威があるのか。何の権利を持って私たちに懲らしめて、訓練して、スパイクして、痛い思いをさせて試練を与えるのか。」反抗する人もいるかもしれません。ヨハネの福音書 2 章を開いて頂きたいと思います。私たちの父なる神様は私たちを子どもとして扱い、そして私たちの父には、神様には私たちに懲らしめる、スパイクする権威がある、権利があるということをこの 2 章から見る事が出来ます。特に 2 章 13 節以降をお読みします。『¹³ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。¹⁴そして、宮の中に(エルサレム神殿の中に)、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、¹⁵細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、¹⁶また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」¹⁷弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす。」と書いてあるのを思い起こした。¹⁸そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。(カギ括弧の中に注目して下さい)「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せてくれるのですか。」(神様、あなたが私たちにスパイクするのは一体何の権利があって、何の権力があってこんな痛い目に私たちに遭わせるのですか。こんな試練を私の人生に許すのですか。こんなハードなレッスンをあなたはさせるのですか。同じことを質問しています。)¹⁹イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」²⁰そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」²¹しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。²²それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。』22 節までお読みしました。「何の権利があって、何の権威があって、あなたは私たちに懲らしめるのですか。あなたは私たちの人生のいろいろなテーブルをひっくり返したり、私たちの人生の中に起こる様々なものを追い出そうとするのですか。」と。そのことに対してハッキリとイエス・キリストが模範をもって私たちに具体的に分かる例をここに示して下さいました。イエスはここで細いなわで、ロープでむちを作っています。まさにスパイクするような場面であります。イエスにはむちを打つ権利、そしてイエスには様々な両替人の台、商売のデスクを、ブースをひっくり返す権利があるのです。それは何故か。19~21 節を読みましたように、イエスはご自分のからだがかわされて、すなわちイエスのからだがかむち打たれて、そして十字架にかかって死なれ、3 日目にそれを建て直すがありますが、それは復活されるということをもって、それがわたしがあなたがたをむち打つに相応しい者であるということを証明されたわけです。私たちの人生の様々な状況をひっくり返すような、私たちの大事にしているものをイエスがどんどん追い出していくような、そんな権利をイエスは持っております。その証拠にイエスのからだがかむち打たれたというものです。

第一コリント 6 章 19 節には、私たちのからだは聖霊の宮だと言われています。このことと是非重ね合わせて下さい。イエスはご自分のからだのことを神殿と言われました。そして私たちのからだも聖霊の宿る神殿、第一コリント 6: 19 に私たちもまた神の宮と言われています。そのことを是非考え合わせて、今から聞いて頂きたいと思います。イエスのからだはむち打たれました。そのむちというのは、その先が幾重にも分かれた拷問の道具でありました。そのむちの先には鋭い金属片、ガラスの破片、動物の骨などが仕込まれていて、それで打たれればただ皮膚が裂けるだけではなく。筋肉もズタズタにされ、骨が見えて、時には内臓まで飛び出してしまう。充分死刑の道具としても通用するそんなむちでイエスのからだは何度も打たれました。何のためにイエスはそこまで打たれたのか。それはイザヤ 53 章にありますように、イエスの打たれたそのうち傷が私たちに癒すということです。何のためにイエスはそのようなむち打ちを耐えられたのか。それは私たちに癒すためでありました。何のため、誰のため。そのことを考えて下さ

い。イエスがむち打たれたのは、私たちの罪を癒すため、赦すため。そしてそれは私たちの受けるべきむち打ちでありましたから、私たちのためにイエスはむち打たれたわけです。

私たちの中には、2000年前のエルサレムの神殿と同じように汚れたものでいっぱいです。当時巡礼者が神殿に来たら捧げ物をするわけですが、携えてきた牛や羊に難癖をつけて「この牛には、この羊には傷があります、シミがあります、シワがあります。」と言って難癖をつけて、祭司たちは「うちにはプレミアムの価値のある生贄用の牛や羊があります。これと交換すればあなたは晴れて捧げ物をして、そしてあなたの罪は赦されます。遠路はるばる動物を携えてきたけれども、残念ながらそのような傷のあるシワのある動物は受け入れられません。これでお帰りいただくか、若しくはうちのプレミアムの価値のついたもう既に検査済の祭司のお墨付きのついた生贄をここで買うか、どちらかですよ。」と言われれば、当然高いお金を払ってでも買わざるを得ません。または、お金を捧げよう、献金しようと思っても「あなたのお金は汚れています。今神殿においてきよめられた献金用のお金があります。これと両替しませんか。そうすればあなたは晴れて遠路はるばる巡礼に来たけれども、ここで神様に献金を捧げることが出来ます。そうでなければ、あなたは他所^{よそ}できよいお金を見つけて来なければなりません。」そんなことを言われれば当然両替せざるを得ません。勿論法外な換金率というものを取られるわけです。ですからイエスの時代の祭司たちは文字通り億万長者でした。そんな彼らを見てイエスは憤慨したのです。「ここは父の家である。祈りの家と呼ばれる所であって強盗の巣としてはならない。」と言って、イエスはむちを作って神殿の中の汚れを、汚染を除去されました。イエスにはその権利がありました。

それと同じように私たちも聖霊の住む宮である、神の神殿であると私たちは言われていますから、イエスが私たちの心の中にも入ってこられて、むちを作ってその汚れを、その汚染を除去するという権利があるわけです。その根拠は言いました。他ならぬ私たちのためにイエスが代わりにむち打たれて、私たちの罪を癒すために十字架にかかって死なれたからです。これ以上の資格はありません。「何故私は神様からそんな痛い目に遭わせられるのですか。」理由は、根拠は明らかです。イエスがあなたのためにむち打たれたからです。そして十字架にかかって死んでくださったからです。十字架刑というのは、ただの物語や、ただの神学ではありません。それは愛に基づくノンフィクションであります。イエスが文字通りあなたのために何をして下さったのか。是非考えて下さい。イエスはあなたをむち打つ権利を持っています。あなたを懲らしめて、訓練して、あなたを矯正する権利を持っています。イエスの受けたむち打ち、釘付けにされた十字架がそのことを証明します。

そしてもう一つ疑問に思われるのは、これまで**へブル書**を学んできて私たちは、イエス・キリストがすべての贖いのわざを十字架の上で完了して下さったと。そしてその十字架の御業は、過去の罪も、現在の罪も、未来の罪もすべてカバーするものであって、イエスの流された血潮はなんと父なる神様の記憶から私たちの犯罪歴を全て消去してしまうものだということを学んできました。**へブル 8章 12節**に『**なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。**』神様の記憶から私たちの過去の罪は、犯罪歴は、前科は全て消去されました。また**10章 8節**『**すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ(すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物)を望まず、またそれらで満足されませんでした。」**』と言い、その続きをずっと読んでいただいて**14節**に『**キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。**』イエス・キリストのなされた贖いの働きは永遠に全うされたもので、もう既にそれは完了したもので、それ以上付け加えるものは1つ也没有。そのことを私たちはこれまで学んできました。すべての罪はイエス・キリストの十字架の働きによって赦されます。すべての罪はイエス・キリストの血潮によって洗い清められ、父なる神様の記憶から永遠に消え去られる、葬り去られるものであります。ということは、もはや神様は私たちの内に罪を見ないということです。私たちは過去のことをいつまでも覚えています。過去の記憶は私たちの脳に刷り込まれています。忘れたくても忘れられない過去の傷があります。でも、神様はそのことを忘れて下さる、もう持ち出さない、もう蒸し返さない、もう過去のことでいちいち「またお前はあの時と同じように同じことを繰り返したのか。」と言うような責めをしない、糾弾をしない、断罪をしないということをこれまで学んできたわけです。そのことを学んだ皆さんは

多分ここに来て、**ヘブル 12章**に来て素朴な疑問を感じていると思います。「神様は私たちの罪を覚えていないのに、どうして私たちの罪を懲らしめることができるのか。矛盾するじゃないですか。」そんな矛盾も何も感じませんでしたという人は、ちょっと鈍感すぎるかもしれませんが、いずれにしてもこれは神学的に議論されるわけです。これまですべての罪はもう赦され、すべての罪は神様によってはもう覚えられていない、忘れ去られているのに、ここに来て神様は私たちを懲らしめるというわけです。忘れてしまうことをどうやって懲らしめることができるのか。いくつかのポイントを、2 つだけ皆さんにお伝えしたいと思います。神様の懲らしめというものは、これは愛に基づくもので、愛をベースにしたもので、懲罰目的ではないということです。懲罰は既に御子イエス・キリストが十字架の上で負って下さいました。ここを誤解すると矛盾を感じるのです。すべての罰はイエスが十字架で負って下さった。だから私たちはもう罰せられることはない。なのに神様は罰せられるように思う。懲らしめるというのは、罰するように思うわけです。でもここでは、懲罰としての懲らしめではなくて、愛をベースにした私たちを矯正する、英語では **correct** するということです。矯正するためのものであると。

先ほど**ヨハネ 2章**からイエス・キリストがむちを作って、汚れきった、汚染された神殿を清められたというお話をしました。イエスにはそのような権利があると言いました。なぜならばイエスは私たちのためにむち打たれ、十字架にかかって死んで下さり、よみがえって下さったお方なので、私たちをむち打つ権利があるのだということを言いました。イエスにはそれだけのことを行う資格があるわけです。それは愛に基づくからです。懲罰目的ではないということは、これはもう明らかで、皆さんは特別これには疑問を感じることもなく、異論を差し挟むこともないと思います。

ただ 2 つ目のポイント、これについてはちょっと考えさせられるかもしれません。神様の懲らしめというのは、実は神様ご自身に、もっと言いますと神様の手によって成されるものではなくて、実は私たちの罪そのものによって行われるものです。分かりづらいかもかもしれませんが、先ほどスパンクという、尻叩きというのは、手で行ってはならないということを言いました。手というのは愛のシンボルであります。神様は直接ご自身の手で私たちを打つことは、為さしません。常にむちを使います。そのむちというのは何かということは今ポイントにしています。そのむちは神様が造られたものではなくて、そのむちというのは実は罪を犯している私たち自身が作っているものだということです。肉の父親は、肉の母親は、スパンクするのに、尻叩きをするのにいろいろな道具を用意します。自分で手作りするような人もいるかもしれません。怪我をさせない程度のもので、年齢に合わせて、男の子と女の子でもちょっと違うと思います。男の子の方が叩いても全然効かないという場合は、もっと痛みの伴うものを作る必要もあるかもしれません。用意する必要もあるかもしれませんが、神様の与える懲らしめというのは、神様ご自身が何かそのようなスパンク棒をお作りになって、それを使うんじゃないんです。**民数記 32章 23節**は非常に重要な聖句です。このことを理解する上でカギとなる聖句です。是非印が付いていない方はしっかりと印を付けて頂いて心にしっかりと刻んで頂きたいと思いますが『しかし、もしそのようにしないなら、今や、あなたがたは主に対して罪を犯したのだ。(特に後半の今から読む部分に目を留めて下さい。)あなたがたの罪の罰があることを思い知りなさい。』これは残念ながら意識であります。直訳のニュアンスを汲み取っているのは口語訳聖書ならびに新共同訳聖書です。新共同訳聖書では、今読んだ後半の部分は『その罪は身に及ぶことを知るがよい。』、また口語訳聖書ではさらに『その罪は必ず身に及ぶことを知らなければならない。』“必ず”という言葉を加えています。そちらの方がどちらかという直訳に近いんですが、英語の聖書はまさにこの箇所を直訳しています。英語でここを読みますと、これは **King James version** 欽定訳聖書です。“be sure your sin will find you out.”『あなたの罪があなたを必ず見つけ出す。』というのが直訳です。あなたの罪があなたをどこまでも追って、必ずあなたを捕まえる、と言っているんです。“あなたの罪が”と言われてる点に注目して下さい。神様があなたを見つけ出す、と言っているわけではありません。神様がまるで刑事のようにあなたを追いまわして、指名手配犯を追うようにあなたを探し求めているわけではありません。あなたの罪があなたを見つけ出すのです。そのあなたの罪というのは、あなたの犯すすべての罪です。例外はありません。「この罪に関しては私を見つけない。」なんて思わないで下さい。一つ一つのすべての罪があなたを見つめます。**ガラテヤ 6章 7節**を見るとそのことが分かります。『7 思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を

蒔けば、その刈り取りもすることになります。⁸ 自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。『あなたが罪の種を蒔けば、必ずその蒔いた種は芽を出して実を結んでいきます。あなたの蒔いた種は、芽を出さないということは絶対にありません。どの罪でも、どんな些細な罪でも、必ず蒔けば、罪を犯せば必ず芽を出して、あなたを見つけます。一度蒔いてしまったらもう手遅れです。取り消すことは出来ません。どんなに後悔しても、「しまった。」と思っても、後の祭りです。もう蒔いたら終わりなんです。「そんな怖いこと、言わないで下さいよ。あなたは私たちを脅しているんですか。」と。その通りです。脅しているんです。聖書の中に『神を恐れることは、罪を憎むことだ。』と箴言に書いてあります。神様を恐れることは、罪を憎むことです。皆さんに罪を憎んで欲しいと思います。残念ながら私たちがどんなに願っても、一度蒔いてしまったらその種は必ず芽を出して実を結びます。その罪はあなたがどんなに後悔しても必ずあなたを見つけます。怖いな、と思うならば、それがよろしいと思います。罪を憎んで下さい。それが、私の皆さんにお伝えしたいポイントです。モーセはカッとなって人を1人殴り殺してしまいました。エジプト人が同胞のヘブル人を、ユダヤ人を虐待しているのを見て、モーセは思わずカッとなって殴り殺してしまって、その死体を地の中に隠したわけです。死体遺棄をしたわけです。隠したつもりでしたけれども、それを見ていた人たちがいました。罪は隠し通すことは出来ません。すべての嘘も、人が見ていないゴシップも。(噂話も、これも罪です。)

「でも私は中々それはちょっと信じがたいです。すべての罪が自分に全部返ってくるなんて。認められません、認めたくありません。」と言うかもしれませんが、さらにエレミヤ 2 章 19 節を開いて下さい。『あなたの悪が、あなたを懲らし、あなたの背信が、あなたを責める。だから、知り、見きわめよ。あなたが、あなたの神、主を捨てて、わたしを恐れないのは、どんなに悪く、苦々しいことかを。一万軍の神、主の御告げ。』あなたの悪が、あなたを懲らし、とあります。厳密には、神様があなたを懲らすのではないのです。厳密には、神様がそれをお許しになるということです。ですから神様が懲らすという時は、神様が直接スパイク棒を作って、そのスパイク棒を使って叩くのではないのです。そうではなくて神様は、私たちが犯す罪・悪・背信(この背信という言葉は、英語ではバックスライド back slide と言いますが。)、私たちの蒔いた種、それがもたらす結果をスパイク棒と見なされて、その私たちの犯した罪がスパイク棒となって私たちを見つけ出して叩くんですが、それを神様が敢えてお許しになって、敢えて用いる。それが神様の言う懲らしめです。そこを誤解しないで下さい。それを誤解すると今までのヘブル書の学びと矛盾点が生じるわけです。「すべての罪が赦されているのに、すべての罪は神様がもうすべて記憶から無くして下さいなのに、どうして神様はなおも私を懲らしめるのか。よく分かりません。混乱してしまいます。」と言うかもしれませんが、そうではないのです。神様が直接懲らしめることはありません。正確には、間接的に懲らしめるということです。これが肉の親のすることとちょっと違うことです。あなたの悪が、あなたを懲らしめる。あなたの背信が、バックスライドが、神様に背を向けて身勝手に歩むことが、あなたを責める、と言っているのです。あなたの悪、あなたの背信、あなたの罪、あなたの蒔いた種、それがあなたの尻を叩くのです。それを神様が用いるのです。

同じくエレミヤ 4 章 18 節もお読みします。『あなたの行ないと、あなたのわざが、あなたの身にこれを招いたのだ。これがあなたへのわざわいで、実に苦い。もう、あなたの心臓にまで達している。』罪がもたらす影響として、苦々しさです。これはまさに精神の病です。心臓にまで達している。これも精神からくる肉体的な病です。今あなたが精神科にかかっているならば、薬物を服用しているならば、または病院に肉体的な病気でかかっているならば、それが必ずしも不可避な先天性の遺伝的な病気だというふうに捉えて、自分を慰めなくて欲しいと思います。その多くは罪が原因だということを聖書は言っているわけです。気を付けなくてははいけません。神様は確かに私たちのすべての罪を赦し忘れて下さいますけれども、あの兄弟殺しの犯人カインのことを思い出して下さい。カインは確かに神様に赦されましたが、カインには 1 つのしるしを神様は与えて、彼が逃亡者として誰かに復讐されて殺されないように守って下さったわけですが、でも、カインは結局は自分の犯した罪のゆえに落ち着く先がなく、一生涯逃亡者でした。誤解のないようにして頂きたいのは、カインは神様には赦されていました。その証拠に神様にしるしを与えられて、額にしるしを与えられて、「その額を見た者はカインには手を出してはいけません。」という神様の恩赦を持っ

て、復讐に復讐を重ねるような呪いの連鎖を神様は断ち切って下さったのですけれども、しかしカインの犯したその罪の結果というものは、これは彼に付いて回りました。彼は一生涯落ち着くところがなく、逃亡者として生き続けなければなりません。それが蒔いた種であります。刈り取ったということです。

アブラハムのことを思い出して下さい。彼は命乞いをして、妻のサラのことを「これは私の妹です。」エジプトに行って自分の妻が美しいのを見て、エジプトのパロ(ファラオ)がもしかしたら力づくで妻を奪い取って私を殺すかもしれない。だから妻のサラに「私の妻とは言わずに、私の妹と言って、私の命の為にあなたは人身御供となってパロのハーレムに入って欲しい。」と、アブラハムは言いました。そしてその結果確かにアブラハムは命を免れたのですが、パロはそれとは知らずに美しいサラを自分の妻として性的な関係を持つとしようとしたわけですが、神様がそこに介入されて、パロはサラと不倫の関係を持つことをせずには守られたわけです。却って神様の御手がそこに及んだので、パロは神様から圧力を受けて、そして罪を犯さないように守られたのですが、病なども生じて、とにかくサラをアブラハムのもとに返さないともっと悪いことが起こるということで、パロはサラをアブラハムのもとに返しただけではなくて、エジプトの様々な金銀財宝もプレゼントをして、それでとにかくこの地から去って欲しいと。「あなたたちがここにいると我々には災いが及ぶから。」ということで返したわけです。それだけ読むと蒔いた種を刈り取っている様子はありません。アブラハムの犯した罪がアブラハムを見つけたというふうには思えませんが、でもそれは時を経て後になってアブラハムを見つけました。罪の結果は伴ったのです。アブラハムは後に子供が与えられていなかったの、何とかして神様の約束を自分の思いで果たそうとしてサラの女奴隷ハガルを使って性的関係を持って、今で言う代理母の役割をさせてイシュマエルという子供を産みました。それが将来頭痛の種となってアブラハムの心を引き裂くようになります。結果的にはイシュマエルとアブラハムは引き離されていきます。そのような苦悩をもたらしたのは他ならぬアブラハムの犯した罪です。なぜならば、ハガルという女性はある時エジプトのパロが与えた女奴隷だったからです。アブラハムが犯した罪は必ずアブラハムを見つけるのです。金銀財宝とともにアブラハムはパロからハガルという女奴隷を受け取ったわけです。そのハガルが何とアブラハムに頭痛の種をもたらしたわけです。

ダビデのことも然りです。バテシェバという女性と不倫の罪を犯しました。発覚を恐れてバテシェバの夫のウリヤを戦地で謀殺しました。まんまと罪を隠したつもりでしたけれども、しかしその罪は明らかとされて、そしてその罪はダビデを見つけました。ダビデの子供たちの中に惨劇が起こりました。妹をレイプするような事件も息子たちの中に起こりました。また息子が父ダビデを殺そうとクーデターを引き起こすような家庭内の不和、家庭崩壊までも引き起こしたのです。まんまと隠したつもりが、実はその罪は時間が経ってから必ず見つけ出して、そしてその罪が成す恐ろしい悲劇をもたらします。

確かに罪の赦しは十字架の上で完了しました。確かにむち打ちはもう終わったんです。懲罰としてのむち打ちは終わりましたが、しかし私たちが矯正する懲らしめの訓練する上でのむち打ちは、今も私たちが罪を犯す限りは続くということを覚えて下さい。これは必ずしも**ヘブル書**のテーマを覆すような矛盾点ではないということです。

そしてもう一つ模範的な例として**ルカの福音書 15章**にあの有名な放蕩息子の話があります。もうこの放蕩息子の話は今更開いて読む必要もないお馴染みの箇所だと思いますが、「お父さん、私の分け前を、相続財産を下さい。」と。本来であればお父さんが死んでから受けるものを、お父さんが生きている間に相続財産をくれと、2人の息子のうちの弟は申し出ました。これは大変失礼なことです。もう失礼を飛び越えて、父親を愚弄することです。「早く親父、死んでくれ。」と言っているわけです。「あなたが生きている間に私の分け前を下さい。」と言うのは、「早く死ね、親父。」と言っているわけです。にもかかわらずこのお父さんは、この弟息子に受けるべき財産を与えましたが、結果は皆さんのご存知の通り放蕩息子でありましたから、すべてお金を女遊び、宴会騒ぎに使ってしまっ、競馬やパチンコ、麻雀に擦ってしまっ全部使い果たしてしまいました。風俗遊びに全て使ってしまったわけです。そして気が付いてみたらユダヤ人が最も忌み嫌う汚れた動物である豚の世話をするような、豚小屋で共に豚と生活をするような落ちに落ちた転落人生を彼は歩みます。もう恐らくそのような放蕩生活から自身の身を汚してしまったと思います。普通に生活出来なくなって、多分何らかの性病も持ってしまったと思います。性病を持ってしまうと普通の

社会では仕事出来ませんから、豚のような汚れた動物と生活する他に、そういうところで仕事をしなければ食っていけないような状況にまで恐らくこの息子は追い詰められ、落ち込んでしまったと思います。でも、その時に息子は我に返りました。自分の罪が自分を見つけるわけです。豚小屋の中で豚の世話をし、豚の食べる食べ物を食べて、ハッと我に帰ったんです。自分がお父さんの家に居た時、自分はこんな惨めな思いをせずにいたんだと。自分の罪が自分を見つけて、そしてお父さんのもとに帰ろうという決心をします。そしてお父さんは遠くから息子を見て、驚くことに走り寄ってきます。当時威厳のある者が走るということはしません。走るという行為は、実は恥ずかしい行為なのです。もう威厳も何もプライドもかなぐり捨てて、息子が来たから走ってきた。でも、息子の方ではそれを違って捉えました。「お父さんは俺を殴りに来たに違いない。スパクシに来たに違いない。」と息子は思ったと思うんですが、しかしお父さんは自分の威厳を捨てて息子の方に走りよって、何度も何度も抱き締めて口づけをして、そして息子のためにローブを着せて、子牛を屠ってご馳走して、そして指輪をはめて(これは息子としてのしるしです。)指輪があればクレジットカードと同じです。指輪があれば何でもお父さんの名のもとに好きなものを買えるようになります。お父さんは息子を受け入れたわけです。その中で私たちが教えられることは、お父さんが見付けたんじゃないありません。放蕩息子の罪がこの息子を見つけたんです。お父さんが警察官となって息子を見つけ出して、そして罰したわけじゃないんです。彼の罪が彼を見つけ、彼を罰して、そして我に帰ったんです。それがポイントなんです。私たちに隠し通すことの出来る罪は一つもありません。そのことを何度も強調しておきたいと思います。隠れて犯した罪でも必ず蒔いた種は芽を出して実を結びます。シークレットな罪というのは一つもないんです。こそこそとあなたが犯した罪。こそとインターネットで、携帯電話でポルノサイトを覗いた罪。こそとクリスチャンの女性たちの間で交わしたゴシップ、中傷話。誰も聞いていないつもりかもしれませんが、すべてそれらの罪はあなたに返って来ます。そしてあなたを懲らしめます。あなたの悪が、あなたの背信があなたを懲らしめるんです。お父さんがあなたを直接懲らしめるんじゃないありません。お父さんは罪にそれをさせるんです。あなたの犯す罪がスパク棒です。尻叩き棒なんです。それがむちであります。神様が、父なる神様があなたを打つことはありません。そのことは誤解しないで頂きたいと思います。罪は必ずあなたを見つけて、罪の結果は悲劇です。罪が成すことを考えるだけで私は戦慄が走ります。聖霊を悲しませてはいけません、というふうにも聖書には書いてあります。それはあなたが罪を犯して聖霊が、神様がショックを受けて悲しむという意味ではありません。聖霊が悲しむというのは、あなたが犯した罪があなたにどんなダメージを与えるのか、そのことを神様はよくご存知ですから悲しむんです。「なんてことをお前はしたんだ。」と思って聖霊が悲しむんじゃないありません。聖霊はあなたのことを深く憐れんで、あなたが犯した罪があなたの人生をどんなにひどいものにしてしまうのか、台無しにするのか。あなたが本来受けられるはずの祝福を逃してしまうのか、そのことを聖霊はよく知っています。だから悲しむんです。酒に酔って直滑降をして、林に突っ込んで下半身付随になってしまった人を私は知っております。罪の結果です。どんなに後悔してもそれは取り消せません。一生涯車椅子のままです。罪の傷は癒えません。残ったままです。必ず罪の結果が伴うということを覚えて下さい。それは消えませんが、なくならないんです。

「そんなこと言われても、私は今日はここから帰れません。」と言う人もいるかもしれませんが、最後に一言だけ言わせて下さい。確かにすべての罪は結果が伴いますけれども、でも同時にすべての罪は赦され、そして神様の記憶からは忘れ去られて、でも同時にその罪の傷というものは一生涯消えませんが、罪の結果は残ります。一生涯車椅子のままです。でも、それでも素晴らしいことに、イエス・キリストを見て下さい。イエスは自分の罪のゆえに傷を受けたわけではありません。イエスは私たちの罪のゆえにむち打たれ、釘で打たれて、槍で刺されて、茨の冠もかぶせられました。そしてイエスの体には傷が残っています。今も残っています。永遠にその傷は消えませんが、天国に行ってイエスを見ても、イエスの体には傷が残っています。復活された直後のイエスの姿を思い起こして下さい。あの疑い深いトマスに対してイエスは「私の傷を見なさい。」見なさいだけではなくて「私の傷に手を当てて触れなさい。」この懐に、槍の刺されたこの槍の穴に指を突っ込めと、イエスは言われました。私は皆さんに何を伝えようとしているのでしょうか。傷は消えないと言いましたが、イエスの傷も消えないんです。そしてイエスはその消えない傷を用いて素

晴らしいことを為さったのです。「それはどうしても理解出来ない、絶対に信じられない、証拠を見るまでは。」頑なで疑い深い懐疑主義者のトマスの心をイエスの傷が捉えて、トマスがイエスの傷に触れたことによって、あんなに頑なだった、絶対に信じないと言っていたあの固く閉じられた心を、イエスの傷が開いて信仰を与えて、トマスは「私の主、私の神。」という素晴らしい信仰告白をしたんですが、その信仰告白を引き出したのは他ならぬイエスの消えぬ傷だったということです。このことを思っ^て皆さんは慰めを、励ましを受けて欲しいと思います。あなたの傷は消えない。バッド・ニュースです。どんなに後悔しても消えません。だから恐ろしいんです。罪が赦されても、神様が忘れて下さっても、あなたの犯した罪は一生消えません。傷が残ったままです。どんなに消したくても消せないんです。悔やむだけです。でも悔やむだけで一生下を向いて、一生私たちは暗いままで生きるのではなくて、イエスのように「私の傷を見て下さい。罪がこんなに深い傷を私に与えたんです。」自分が犯した罪もあれば、人が犯した罪によって傷ついた傷もあろうかと思っ^ています。でもその時に、イエスと同じように「私の傷に触れてみて下さい。私はこんな傷を負ってしまったけれども、今私は生きています。生かされています。イエスと同じ復活の命を頂いたんです。どうかこの傷に触れて、あなたのその頑なな心を神様の御前に開いて下さい。イエスは私の主です。私の神です。こんな傷を負った私もこのイエスによって罪赦されて、こんな私のためにイエスは永遠に消えない傷を負って下さいました。そして私の受けた傷は、地上では一生涯消えませんが、天国に行ったら、携^せられたら私の傷はすべて消えるんです。でもイエスの傷だけは永遠に天国に行っても残るんです。素晴らしいじゃないですか。」是非神様に対して「私の傷はこの地上に生きている限りは消えません。このことは認めます。でも後悔ばかりしているつもりはありません。神様どうかこの傷をあなたが用いて下さい。頑ななトマスのような疑い深い人たちの心を開くために、彼らの心に届くために、どうか私の傷を神様用いて下さい。」と、そのようにあなたが祈るならば、あなたの傷は用いられます。感謝です。「こんな傷は誰にも見せられない。こんな傷は伏せておきたい。なくしたいんだ。」と一生懸命私たちは何とかして傷を自分の力で、その刺青を何とかレーザーで消そうとします。でもそれは無駄な努力です。一生消えません。どんなにあなたが良いことをしても。でもその傷をむしろ神様が用いてくださるとしたらどうでしょうか。開き直るという意味ではありません。罪に悲しみつつも、罪が成すことに恐怖を覚えながらも、後悔しつつそれでも「この傷を主よ、用いて下さい。」と。敢えてその傷を曝^{さら}して下さい、隠さないで。敢えてその傷を主に捧げて、明け渡して「どうか用いて下さい。」と。隠しているままでは何にもなりません。何も益もたらしません。あなたはあなたのその傷に一生涯苦しむだけです。でもあなたの傷を一度神様の御前にさらけ出して「私の過去も、今犯している罪も、これから犯してしまうであろう罪も、その結果も全てあなたの御手におゆだねします。私は真摯に、厳肅にこのことを受け止めて、認めて、罪の刈り取りもします。罪の結果も受け止めます。でも一生後悔するつもりはありません。もう二度と罪を犯さないように気を付けます。でもこの傷すら神様あなたが用いて下さい。私の頑なな夫のために、私の頑なな子供たちのために、私の頑なな夫や兄弟や姉妹のために、どうかこの傷を使って下さい。過去の傷も、痛みも、全部あなたにゆだねます。」と。それが私たちの今成すべき働きだということを知って下さい。今日はこれで時間が来たので終わりたいと思っ^ていますが、父なる神様はあなたのもとに走り寄って下さいます。あなたをぶつためではないんです。あなたをしっかりと抱き寄せて、抱きしめて、口づけして、何度も何度も「よく帰ってきた。」と。放蕩息子、放蕩娘の私たちを大歓迎して、上等な上着を着せ、ローブを着せて、そして靴を履かせて、指輪をくださって、そして子牛を屠^{ころ}ご馳走を振る舞って下さいます。それが私たちの父です。私たちをいつも懲らしめて、ぶって、むち打って痛めつける厳しい雷親父ではないんです。父が懲らしめるのは、私たちの罪がスパンク棒となって私たち自身を打つということ。ここだけは絶対に誤解しないで下さい。父なる神様は慈愛に満ちたお方です。ひとり子イエスを与えるほどに私たちを愛しておられるお方です。その父の子育てを私たちは受けられている。素晴らしいですね。その父の子育てを受けながら私たちは成長し、そして今ここにいる皆さんもそれぞれ結婚なさっていたり、お子さんがいたり、孫がいたりすると思っ^ていますが、是非とも聖書的な子育てをして頂きたいと思っ^ています。手遅れじゃありません。失敗してしまったという人もいます。教会にも子どもたちが沢山いますから、是非その子どもたちのためにも祈って下さい。孫もいますから、孫のためにも是非祈って下さい。そして、むち打ちがキーです。スパンクがキーで

す。児童虐待ではありません。この社会が何と言おうと、専門家が、精神科医が、心理学者が何と言おうと、何千年も変わらないこの聖書は、永遠に堅く立つ御言葉が真理だということを知って下さい。彼らの主張はコロコロ変わります。彼らが良いと言うものは、むしろ悪いものとなって返ってきます。子供を薬漬けにしないで下さい。あなたも薬漬けにならないで下さい。何も良いものをもたらしません。百害あって一利なしです。是非イエス・キリストの打ち傷があなたを癒すということを信じて下さい。あなたのためにむち打たれたお方が、あなたを懲らしめるというその愛を受けて下さい。もう尽きることはないんですけれども、この辺で終わりたいと思います。また今回は残りのヘブル **12 章** を皆さんと共に分かち合っ参りたいと思います。